

共通テスト国語の 「試験時間不平等」問題！

「100分で現代文のみ」の大学は出るのか？

旺文社 教育情報センター 2019年8月1日

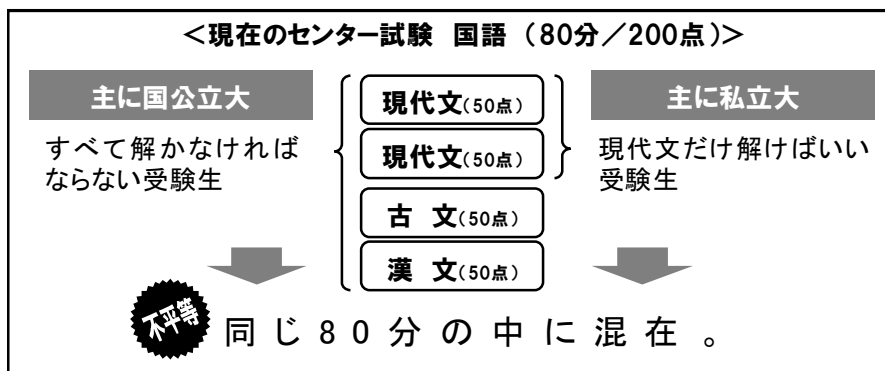
2021年1月スタートの共通テストについて、注目は「英語の外部検定利用」「記述式」「思考力系の問題」に集まりがちだ。特に最近、これらの点について社会的にも議論が活発化してきた。

これまで新入試の構想は「これからの社会で子どもたちに必要な能力」について、大人からのメッセージをこめて制度設計がなされてきた。それが最近では「公平性」「経済的負担」「採点の仕組み」など、より現実的なポイントについて受験生本位の視点で議論がなされているように感じる。そうしたときにもう1点、考えなければならないのが国語の「試験時間不平等」問題だ。

※本記事では「近代以降の文章」を「現代文」、一部で「古文、漢文」を「古漢」と表記。

※以下の内容はセンター試験、共通テストに関するもの。各大学の独自入試については扱わない。

●国語の「試験時間不平等」問題とは？



【共通テストで「不平等」はさらに拡大！？】

「記述式」の導入で、試験時間は100分に延長。

「100分で現代文のみ」のパターンも出てくるか！？

センター国語は「現代文」「現代文」「古文」「漢文」の計4問が出題される。センター利用をしている大学に対しては、受験生の各科目の得点が入試センターから送られる仕組みになっているのだが、国語だけに関してはこの大問別に得点が提供される。

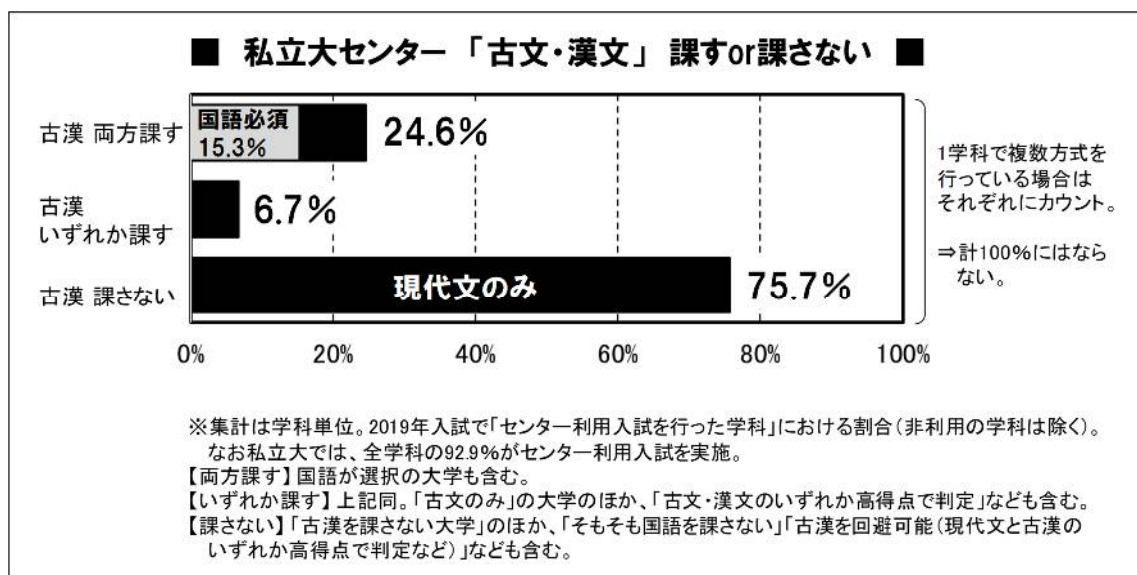
そのため大学側としては「現代文のみ」判定に利用、という選抜が可能で、実際私立大では「現代文のみ」の大学が圧倒的に多い。

センター国語の試験時間は 80 分で、そこには 4 問フルで解かなければならない受験生と、現代文 2 問だけ解けばいい受験生が混在する。これがセンター国語の「試験時間不平等」問題だ。

この不平等感は共通テストでさらに拡大する危険性を含んでいる。国語は記述式が新たに加わることで、試験時間が「80 分⇒100 分」に延長。「100 分で現代文のみ」も制度上、起こりうることになる。

また、重要なのはセンター国語の出題範囲は「国語総合」で共通必修科目、そこには古文、漢文も含まれるという点。日本の高校生は原則、古文、漢文を履修しなければならない。

●私立大 全学科の 4 分の 3 が「現代文のみ」



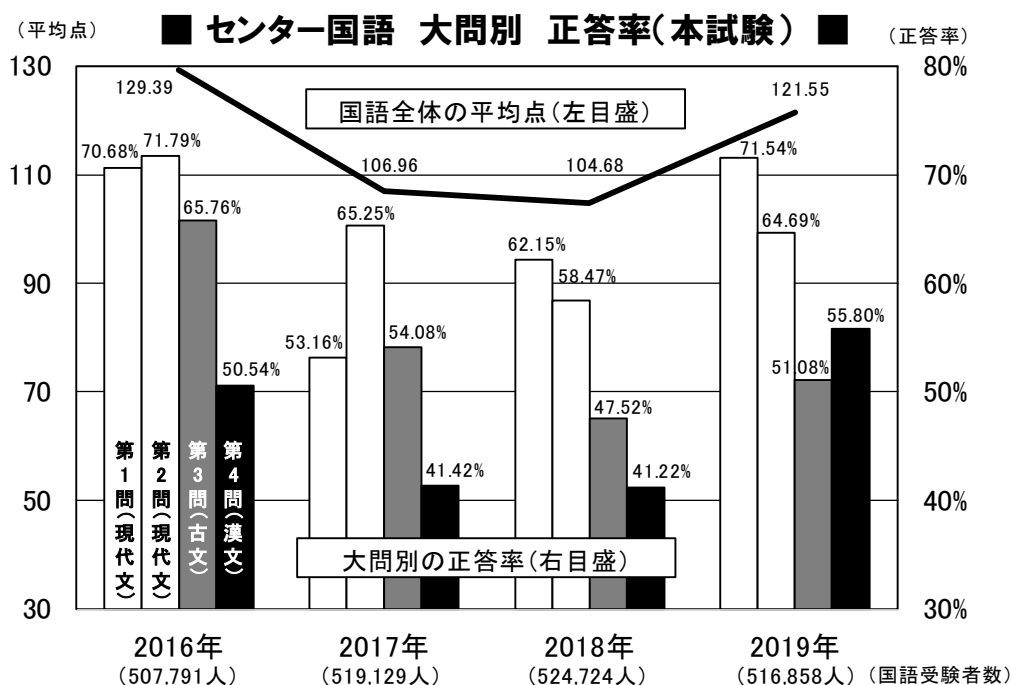
実際、センター試験で「国語は古漢を課さない(現代文のみ)」という大学はどの程度あるのか。国公立大は両方課す学科が大半。一方、私立大はいずれも課さない方式を行っている学科が全体の 4 分の 3 にのぼる(センター利用入試を行っている学科ベース)。

私立大では逆に、両方課す方式を実施した学科は 4 分の 1。ただしここには国語自体が選択の学科を含んでおり、国語が必須の学科に限定するとわずか 15.3%になる。古漢必須かつ国語必須の私立大は、主に中堅以上の大学の文系学部。そのほかは文系の中でも文学部系、さらには日本文学科や歴史学科などが中心だ。

●受験生サイドの実態

それでは受験生側はどうか。「現代文のみ」の受験生は明確には識別できない。古漢を「マークすらしなかった」というのならわかりやすいが、「問題を見ずにマークだけ埋めた」「もしかしたら点が取れるかも程度で解いた」という受験生もいるだろう。

そこでセンター国語の大問別の正答率を見てみよう。下のグラフは自己採点ではなく、センター国語受験者 50 数万人をすべて集計したものだ。



例年、現代文に比べて古漢の正答率が低いのが見て取れる。原因としては「古漢の難易度が高かった」とか、「試験時間が足りなかった※」という可能性もなくはない。しかし現実的にはやはり、古漢を捨てた受験生がいる表れだろう。

※他科目でも後半の大問の正答率が低ければ試験時間の不足が考えられるが、必ずしもそうはなっていない。

さて、古漢の得点率が低いのは明らかだが、現代文との差をどう評価すべきか。前述の私立大で両方課す大学が非常に少ないことを考えれば、もっと大きな差が出てよさそう。差が小幅だと評価するのであれば、その要因は国公立大志望者が多いこと（実際には出願しなかった受験生も含め）、古漢を課すような中堅以上の私立大を併願する受験生が多いこと、あとは上述の「現代文のみの受験生＝必ずしも古漢は0点ではない」という点だろう。

●大問別の成績提供はセンター試験2年目から

国語で「現代文のみ」の選抜が可能となったのは、意外なことにセンター試験のスタートからではなく、2年目の1991年から。この年のセンター試験実施要項に、国語は大問別得点を大学に提供することが盛り込まれた。

それに伴い、実施要項内の「出題教科・科目等」において「現代文＝2問100点、古文＝1問50点、漢文＝1問50点」が明記され、実際の問題冊子の表紙にも大問構成が表記された。大問構成は共通一次から変わっていないが、それがあらかじめ示される形となった。

<国語の試験時間、配点、大問構成>

■1989年【共通一次 最終年度】

100分 / 200点 / 現代文50点×2問、古文50点、漢文50点

■1990年【センター試験 初年度】

80分 / 200点 / 同上

■1991年【センター試験 2年目】 ※国語の大問別 成績提供スタート

80分 / 200点 / 同上

■2021年【共通テスト 初年度】

100分 / 200点+段階表示 / 同上+記述式（段階表示）

実施初年度、実際に「現代文のみ」としたのは、岩手大一工、東京学芸大の一部、埼玉大一工、富山県立大のみ。わずか国公立4大学でスタートした「現代文のみ」は、この後、私立大を中心に急激に広がっていった。

●新入試での検討

共通テストへの移行にあたり、文科省や入試センターも国語の「試験時間不平等」問題を放置していたわけではない。すでに2年前には共通テスト「実施方針」で、大問別成績提供の廃止と見て取れる記述が盛り込まれていた。

<共通テスト国語の成績提供 検討の経緯>

■2017年7月【実施方針】（文科省）

- ・「大学に対して、すべての問いの結果の活用を求める。」
- ・「現代文、古文、漢文の成績を、国語として一括で提供することを検討。」

↓

■2018年6月【問題作成の方向性】（入試センター）

- ・「国語は古文、漢文も含めた全体の素点での提供を原則。参考として大問別も検討。」

↓

■2019年6月【実施大綱】（文科省）

- ・大学が共通テストを新規利用する際に、文科省と入試センターに届け出る書類から、国語の特定分野（現古漢）の利用を記入する必要がなくなった。

■2019年6月【問題作成方針】（入試センター）

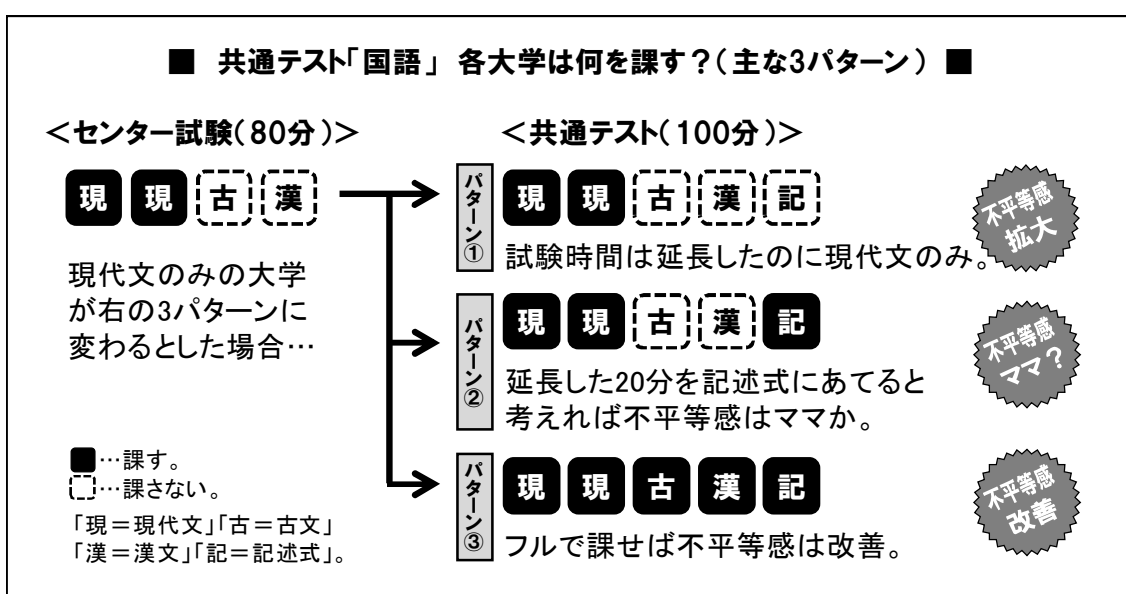
- ・「参考情報として、国語の大問別得点を提供。」

「実施方針」は大問別廃止を匂わせているが、このとき文科省に問い合わせてみると、大問別の提供も検討という回答だった。ただしそれは明記せず、廃止の可能性を大学や高校に投げかけている。

しかしその後の公表資料では、廃止のニュアンスはトーンダウンしていく。結局、共通テストスタートの2021年も、入試センターは大問別の成績を提供することになった。大学はこれまでどおり「現代文のみ」の選抜が可能だ。ただし「参考情報」という位置づけとなった。この何やら漂う格下げ感は「そのうちなくす」という意図が込められているのか。次に動きがあるとすれば、2025年の新カリ入試だろう。

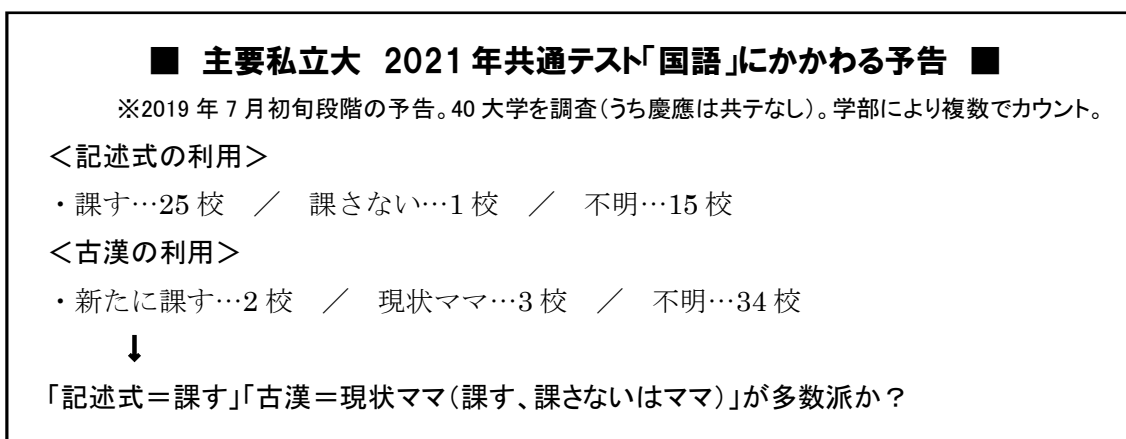
● 共通国語 各大学は何を課す？

実際、各大学はどう動くのか。新たに「記述式」の大問が加わり、試験時間は「80分⇒100分」に延長される中、大学の成績利用は主に以下の3パターンが考えられる。



● 私立大 新入試の予告

上図を踏まえて私立大の2021年入試の予告(7月初旬現在)を見てみよう。ここでは2018年の一般入試で志願者総数が上位40位までの大学を調査した(2019年入試は集計中)。上図のとおり不平等問題を考えるにあたり、記述式と古漢の有無に着目した。



記述式についての予告は多くの大学で見受けられ、また現状、「課す」大学が多数派だ。

一方、古漢の扱いについては、なかなか明確な予告が見られない。この40校はいわゆる難関～中堅上位で、前述のとおり、この層であればすでに古漢を課している大学も多い（ただし文系学部）。しかしそれでも予告には「国語」としか書かれておらず、古漢を含むのかはわからない。

そうした中、注目したいのが「古漢を新たに課す」2校。東海大と龍谷大だ。

<東海大の現在のセンター国語>

- ・文学部、文化社会学部…古漢を課す。
- ・そのほかの学部…古漢を課さない。または国語自体を課さない。

<龍谷大の現在のセンター国語>

- ・文系学部の一部の方式（主に後期）…古文または漢文を課す（現+「古または漢」）。
- ・そのほかの方式、学部…古漢を課さない。または国語自体を課さない。



両大学とも共通テストは古漢を課す方向へ！（2019年7月現在の予告）

もちろんこれは「予告」であり、変更の可能性もある。特に龍谷大は古漢の導入理由について「国語の成績提供の取扱いが変更される見込み」（要は前述の大問別成績の廃止）であることを挙げている。結局、大問別の成績提供が継続になったので、予告が変わることもありうるだろう。

●まとめ 一不平等問題の論点一

<必修科目と入試科目>

まず、センター国語は「国語総合」が出題範囲で、必修科目だという点が重要な論点になろう。そこには古漢も含まれるのに、入試で課さない大学が多いとなると、高校現場や高校生は「勉強しなくてよい」ということになりがちだ。しかし一方で「必須科目＝入試で課さなければならない」というロジックは成り立たない。数学、理科、地歴、公民、英語にも必修科目はあるのに、それを課さない大学はいくらでもある。受験生の入試負担は増え続けている※。負担増は慎重に検討すべきだ。

※2004年の国立大の原則5教科7科目化、2006年のセンターリスニング導入、2012年のセンター公民4単科目（倫政経）の新設、2015年のセンター理科の単位増などがあり、2021年の新入試では、共通テスト記述式の導入、英語4技能化の加速、主体性の評価がスタートする。2025年の新カリ入試以降もどうなるかわからない（情報科目の新設など）。

<国公立大と私立大の入試システム>

私立大で古漢を課さないところが多いのは、志願者集めの側面も否定できない。しかし国公立大と私立大で入試システムが異なる点にもその原因があると考えられる。

■ 国公立大と私立大の入試システム ■

国公立大の入試(主に国立大)

【1次】センター試験(5教科7科目など) + 【2次】個別試験(1~3教科など)

↑ 基礎的科目の達成度を見る。

↑ 学科に必要な科目を見る。

私立大の入試(センター利用)

センター試験のみ(2~3教科など)

↑ 学科に必要な科目を見る。

学科のアドミッション・ポリシーが直接的に反映!

私立大は「センター1発」で合否が決まる大学がほとんど。そうすると学部学科のアドミッション・ポリシーが直接的に入試科目に反映される。古漢が必要ない学科であれば、大学は「課さない」という判断になる。

逆に課した場合、例えば理工系の学部で数学、理科をがんばった受験生が不合格、古漢で稼いだ受験生が合格したとすれば、それが良い選抜かという疑問符がつく。

<センター試験(共通テスト)の機能>

私立大のセンター利用入試は遠隔地の受験生に対して「受験機会の確保」という機能も果たしている。確かにセンター国語で古漢を課すのはある意味で正論だ。しかしだからといって、一律に課すとした場合(一方で独自入試では課さない場合)、センター利用入試でないとなかなかその大学を受験できないエリアの受験生に対して、不公平感が生じてしまう可能性もある。



このようにセンター試験で「古漢を課さない=悪」とは単純に言い切れない。しかし現実として試験時間の不平等問題は残る。それは共通テストでさらに拡大する危険性がある。

大学は 2021 年の共通テストから古漢を「課さないとすれば ⇒ 不平等問題は残る」「新たに課すとすれば ⇒ 今からの告知では受験生に時間がない(もう高2の夏)」。どちらの選択でもキレイな解決にならないのが悩ましい。

本稿では改善策を提示するには至らなかったが、それを模索する中で強く感じたことは、この問題について議論の痕跡があまり見られない点だ。文科省や入試センターは「実施方針」などで投げかけはしたけれども、大学のリアクションは薄い。1991年から30年近く行われてきたからといって、そのまま放置してよいものではない。新入試を迎えるにあたり、我々は子どもたちのためにこの問題について真剣に考えるべきだ。

(2019.08 石井)